



## 講演 梅原 猛

哲学者  
国際日本文化研究センター顧問  
文化勲章受章（平成11年）

大正14年仙台市生まれ。京都大学文学部を卒業後、立命館大教授を経て、昭和47年、京都市立芸大教授、49年同大学長、62年には国際日本文化研究センター所長に就任。平成7年、同研究センター顧問となった。

専攻は西洋哲学であるが、それに留まらず、『隠された十字架』、『水底の歌』、『黄泉の王』、『海人と天皇』など、深い歴史への考証と奇抜な着想によるセンスある学問で、学界に新たな問題提起をしている。いわゆる「梅原日本学」と呼ばれるものである。

近著に『法然の哀しみ』（梅原猛著作集第10巻・小学館）がある。「法然の哀しみ」は、今回の記念講演のテーマでもあるが、知恵第一、一生不犯の聖人といわれた浄土宗の祖・法然が、なぜ新仏教を立て、末法の世に信仰の光をあてようとしたのか。その聖人像の奥に秘められた生身の人間としての法然に、梅原流の温かい視線で肉迫した著作である。

### 業績【主な著書】

- ・美と宗教の発見（昭和42年 筑摩書房）
- ・地獄の思想 ー日本精神の一系譜  
（昭和42年 中央公論社）
- ・隠された十字架 ー法隆寺論（昭和47年 新潮社）
- ・水底の歌 ー柿本人麿論（昭和48年 新潮社）
- ・学問のすすめ（昭和54年 佼成出版社）
- ・梅原猛著作集（昭和56年 集英社）
- ・日本の深層（昭和58年 佼成出版社）
- ・ヤマトタケル（昭和61年 講談社）  
昭和61年 スーパー歌舞伎「ヤマトタケル」として上演
- ・ギルガメシュ（昭和63年 新潮社）
- ・日本人の「あの世」観（平成元年 中央公論社）
- ・聖徳太子（平成元年 小学館）
- ・日本の原郷 熊野（平成2年 新潮社）
- ・小栗判官（平成3年 新潮社）  
平成3年 スーパー歌舞伎「オグリ」として上演
- ・海人と天皇（平成3年 朝日新聞社）
- ・古代幻視（平成4年 文藝春秋）
- ・中世小説集（平成5年 新潮社）
- ・世界と人間 思うままに（平成6年 文藝春秋）
- ・將たる所以 ーリーダーたる男の条件（平成6年 光文社）
- ・自然と人生 思うままに（平成7年 文藝春秋）
- ・心の危機を救え ー日本の教育が教えないもの（平成7年 光文社）
- ・京都発見（一）地霊鎮魂（平成9年 新潮社）
- ・癒しとルサンチマン 思うままに（平成9年 文藝春秋）
- ・京都発見（二）路地遊行（平成10年 新潮社）
- ・芸術と生命 ーディオニュースに魅せられて（平成11年 岩波書店）
- ・亀とムツゴロウ 思うままに（平成11年 文藝春秋）
- ・天皇家の“ふるさと”日向をゆく（平成12年 新潮社）
- ・シギと法然 思うままに（平成12年 文藝春秋）
- ・法然の哀しみ（平成12年 小学館）

# 利他のこころを育てる

## いまの日本に宗教教育こそ必要

いまの日本には、宗教教育が必要だと私は思っています。未成年の犯罪が増加し、凶悪化している現代社会の中で、いまこそ宗教がどんなに大切なものであるかを、子どものときから教えずにはなりません。人間には、人間を超えた絶対のものがああります。それは巨大なものであり、その巨大なものに対する敬意、尊敬の心を失ったら人間は生きてはいけないということを、しっかり子どもたちに教えなければならぬと思います。

日本人が長い間、心を傾倒してきたのは仏教でした。ところが、いまの人たちは仏教のすばらしさを忘れてしまっています。日本の仏教が、最も活動的だったのは鎌倉時代でした。それ以前にも、奈良時代には聖徳太子や行基、また平安時代には最澄や空海らの立派な人物がいました。しかし、最も火のように宗教的霊性が燃え上がった時代は鎌倉時代でした。律令体制の旧制度が崩壊し、鎌倉幕府という新しい体制ができた時代の移り目ですが、こうした背景が宗教にも影響していたのでしよう。

この時代には、法然上人やその弟子の、親鸞上人、一遍上人ら浄土教系の多くの宗教家が出現しており、彼らの精神的な遺産で今日の日本人は生きていくといっても過言ではありません。

日蓮上人もこの時代の人ですが「法然はあの世だけに期待している、もっとこの世に力強く生きる生き方を教えるべきだ」と激烈な言葉で法然上人を批判しました。ところが、その日蓮もまた法

然の影響をたくさん受けているのです。さらに、この鎌倉時代には栄西や道元といった優れた人物が登場し、中国から入ってきた禅が日本に定着しました。

いまも日本の寺の檀家は、浄土真宗および浄土宗が半分ぐらいで、これに日蓮宗と禅宗を加えて約八割が鎌倉仏教の信者です。このように、鎌倉時代は宗教的情熱に燃えましたが、そのトップバッターが法然上人でした。ですから、法然上人なくして親鸞上人も一遍上人も、日蓮上人すらありえません。このように、鎌倉仏教の最初の道を開いたのが法然上人ですから、「法然上人を語らずに日本の仏教は語れない」というほどの巨人なのです。

## 法然上人が近代人になじめなかった理由

それにもかかわらず、法然上人は現代の日本にはあまり親しまれませんでした。法然上人について書かれた一般書はほとんどありません。専門家の優れた研究はたくさんありますが、「法然」という人間を一般の人にわかりやすく伝える本が意外に少ないのです。親鸞上人についての書物はたくさんありますが。

それは、法然があまりに完璧すぎるからです。法然は勢至菩薩の生まれ変わりといわれ頭のよさは抜群でした。そのうえ、戒律に対しても堅固な僧でした。女性にふれたことのない清僧をあげるなら法然上人とすらいわれます。後白河法皇が「セヌハ仏、カクスハ上人」といいましたが、こ

れはセックスをしないのは仏さまだが、隠すのは上人だという意味です。しかし、法然は実生活でもほぼ完全に戒律を守っていましたから、「どうも法然上人は仏の仲間入りをしたのではないか」といわれていました。

そうした完璧な人間は、近代人にはもうひとつ近寄りにくいわけです。それもそのはず、親鸞には少なくとも三人の妻がおり、少しあとの室町時代の人ですが、蓮如は六人の妻で二十人の子どもをもうけました。

親鸞はみずから「愛欲の谷間に沈没している」と語っています。こうしたことをいうと、だれも安心できるわけです。「自分と同じだ。上人も悩むんだ」と親しみもちます。ところが、法然は女性にふれたことがないため、「そんな人にはかなわない」となり、あまり完璧すぎて親しみがわかなかつたのです。

法然には御影が多くあり、どれも福々しい顔をしています。頭が大きくて耳が長く、頭の真ん中がへこんでいて、それを“法然頭”といいますが、いかにも慈悲円満なやさしい顔をしています。ところが、親鸞は鬱屈しているような怖い顔をしており、一遍は遠いところを見ているような、いかにも変わった容貌です。そのような人どこか親しめませんが、法然はあまりにも福相で人格円満な風貌のため、かえって親しみがわいてきませんでした。

## 生い立ちから生まれた法然上人の思想

ところで、私と法然上人との縁といえば、私の学んだ名古屋の東海中学が、浄土宗の知恩院が設立した学校であったことです。

私は中学四年のころに青春の悩みに襲われ、文学や宗教に興味を持つようになって法然の本も読みました。それが法然上人との出会いでした。

長じて、法然上人について調べを進めているうち、父時国の殺害事件の詳細が明らかになり、それにつれ、本当に法然上人が好きになりました。通説である『四十八巻伝』という、いわば教団公認の伝記にある、父暗殺の真相は少し違うのではないかと気づくことによって、法然がより親しくなっていたのです。

法然上人の養子ともいってもいい源智が書いた最も古い法然の伝記『醍醐本』が、いちばん信用できますが、これと『四十八巻伝』とでは内容が異なり、父の事件の時期が違ってきます。『四十八巻伝』によれば、事件は法然が九歳のときに起きています。父は死ぬ間際に「私のように殺されることはやめて、お前は僧になってくれ、そして私の菩提を弔ってくれ」といった。父親は押領使で、いわば田舎の警察署長のような身分でした。そして、法然は故郷の岡山県美作の寺に預けられた。その後、仏教の本山である延暦寺に登ったとあります。

それが『醍醐本』では違っているわけです。法然はすでに九歳のときには坊主になっており、極めて優秀なので「田舎の寺におくのはもったいない」と、一五歳で比叡山に行くことになった。そこで、別れのあいさつのため押領使の父のところに立ち寄ったところ、「私には敵がいる。近く殺されるかもしれない。そしたら私の菩提を弔ってくれ」といわれたとなっています。

これは大変驚くべきことです。少年は比叡山へ行っても不安で仕方ありません。やがて父暗殺のニュースが届く。まだ一五歳の思春期の法然は

大きな衝撃を受けました。彼は遁世しようとしたが、「遁世するものけっこう。しかし学問をしてからでも遅くない」という師叡空の忠告を受けて、これは大変なことですが、三年間で「天台三大部」という天台の根本経典、すなわち『法華玄義』『法華文句』『摩訶止観』の三書60巻をマスター、そののちに、黒谷青龍寺の叡空のもとで経蔵（書庫）に隠遁しました。

それでは、父時国はなぜ殺されたのでしょうか。前にも少しふれましたが、父の職業である押領使は、律令社会を乱す悪党を取り締まるため、悪党のうち、ましな主だった者が官職を与えられ、悪党を押さえるのが仕事です。律令制が崩壊すると、土地がいちばん問題になります。そんな土地をめぐる血で血を洗うような争いを繰り返してきたのが父時国だったと思います。それで恨みを受けて夜討ちにされたのでしょうか。ですから、父は、はじめから悪党といわれても、仕方のない人間ではなかったのではないのでしょうか。

また、母は秦氏で渡来人でした。渡来系は平安時代初期には、桓武天皇が渡来系の血を受けていたので重要視されましたが、しだいに社会が固まってくると、差別されるようになりました。

このように、渡来人の血を引き、土着の農民から見れば、多少差別されていたと思います。法然も自分自身で「辺境の土民」といってのように、やはり、身分が低く、差別されていたのでしょうか。このような生い立ちは、法然の思想を考えるうえで非常に重要だと思います。

### 一般の民衆はなぜ、よろこんだか

では、法然の仏教についてお話ししたいと思

います。法然の仏教への道は、その弟子の一人、源信が『往生要集』で述べているように、「念仏は末代の凡夫の偉業である」という説から出発しています。つまり、末代の凡夫を救うには、念仏がいちばんいいということです。

極楽浄土の美しい様を想像し、極楽浄土の主である阿弥陀仏を思うのが本来の念仏です。法然は、この念仏をいままでの「観想の念仏」とせずに、口称の念仏だと考える「専修念仏」に踏み切りました。

阿弥陀様は、ごくわずかか一部の人しか、極楽浄土へ行かせないはずはない。善行をすればいい、寺に寄付すればいい、それではすべての人ができない。

しかし阿弥陀様は、平等な慈悲をもっているから、だれでも導いてくれる。とすれば、念仏はイメージーションではなく、「南無阿弥陀仏」と口で唱えることこそ念仏だと解釈したのです。

このように、それまでの念仏の解釈を一八〇度変えたところ、一般の民衆はよろこび法然の熱烈な信者になりました。それが法然の“宗教改革”でした。

### 悪人も女人もすべての人間は平等

法然上人は、そうした専修念仏の思想を『選択本願念仏集』に著しています。法然の思想は「凡夫往生」といって、だれでも極楽浄土へ行けるといえるものです。これは、最も極楽浄土へ行きにくい悪人も行けるといえる「悪人往生」です。法然は、悪人こそ極楽浄土に行けるといえる思想を出したわけですから。のちに、この思想は親鸞上人によって発展し、『歎異抄』の第三条「善人なおもて往生を

とぐ、いはんや悪人をや」という言葉で表現されます。

まだ「女人往生」という大変重要な考え方があります。女人が往生できないというのが従来の仏教でした。たいていは煩惱多者として、仏にはなれないとされてきました。たとえば、天台宗や真言宗では、女人は比叡山や高野山には上がれないという差別もありました。

ところが、日本では古くから女人は仏教と関係が深く、聖徳太子のころは推古天皇（女帝）、光明皇后は仏教の信徒でした。聖徳太子も『勝鬘教』という経典を講義しており、また平安時代になってからは「龍女成仏」といって、龍女ですら成仏できるという法華経がはやりました。

『源氏物語』に登場する女たちも煩惱を捨てて男への執着を断ち切り、尼僧になるという話がありますが、ここに瀬戸内寂聴さんは着目し、浄土教より一歩先に「女人往生」を進めた物語だといいました。

源信の説く浄土教は女人成仏と深くかかわってきましたが、「女人往生」の道を決定的に開いたのは法然でした。法然の唱える思想ではじめて、すべての人間が完全に平等になりました。

こうしてみると、法然の思想がどんなものかわかってきます。悪人も女人も、あの世では平等であると。なぜ、こうした思想にたどりついたのでしょうか。それは父と母を極楽浄土に送りたいからです。いままでの思想では、悪人として、あるいは女人として、父も母も極楽浄土から拒否されます。

それを裏づけるように、京都の粟生光明寺には非常に奇妙な像があります。それは法然が流罪になったとき、母からの手紙を張り、漆を塗りこめ

て作られた「母子一体像」という文字どおり母と子の血肉の、日本ただ一つしかないような像です。これは、法然の母に対する強い思いを物語っています。

こうして、「口称念仏」「凡夫往生」などの思想をみてくると、法然の感情がよくわかってきます。あの温かな顔には実は深い悩みが隠されていました。そこには父や母への悲しい愛があると思わせるをえません。また、こうした新しい思想は、先にお話しした法然の生い立ちによるものだと考えられるのです。

### ここに法然上人の人間をみた

法然上人には、多くの弟子がいましたが、証空、弁長、親鸞という三人の弟子によって、法然の思想は末永く残ることになりましたが、私が法然に最も人間をみたのは、後白河天皇の皇女、式子内親王に書いた手紙です。

その手紙が、法然が書いたものの中でいちばん長いのです。あて名が正如房となっていましたので、相手が女性なのはわかっていたのですが、それが式子内親王であると判明したのは二十年ほど前のことです。

式子内親王は忍ぶ恋の歌人として有名ですが、恋の歌人としては小野小町や和泉式部が知られています。内親王はその身分からも多くの男性を相手に、奔放な恋をするわけにはいかず、逆にその恋を隠さなければならなかった。そんな忍ぶ恋の天才である式子内親王の恋人が、法然ではないか。大変意外なことですが、その手紙を読んで、私にはそう解釈できるのです。

その手紙というのは、式子内親王は治らない病

気にかかっている、死ぬ前に法然上人に会いたい、そして臨終の念仏を授けてほしいとやってきた。それに対して、法然は断りの手紙を出したわけです。周辺には藤原氏など、敵意を持っている人がたくさんいて、一度見舞いに行っただけでもスキヤンダルになり、弾圧する機会を与えてしまう。だから、法然はその頼みを断りました。

ですが、ほんとうは見舞いに行きたくて仕方がない。結局、法然は行けない代わりに、手紙に綿々と教えを説いた、阿弥陀様は本願として念仏しなさいと懇々と書いています。その最後に、「どうせ、この世のことはもうすぐ終わる、私もあの世に行くのは近い、いま会うのは、ただ肉体に執着するだけのこと、だから今度、あの世で同じ蓮の上で行く末を語りあいましょう」と。このセリフは、近松門左衛門の心中物にも出てきます。

その言葉を何度読んでも私にはラブレターにしか思えません。二人の間に恋があったのは間違いないでしょう。こうした話から、大変に法然の人間味を感じます。式子内親王とのことは、法然にとって、決してマイナスではありません。

### 「利他の精神」を子どもたちに教えたい

ここで、法然上人の弟子の一人、親鸞上人の教えについて、少しふれたいと思います。親鸞の人生は法然と大変異なっています。親鸞は若いときに越後に流罪になっていますが、貴族の出身らしく一途で、衝突することをあえて厭わないような、激しさがあります。そうした人生を踏まえ、親鸞は法然の思想を『教行信証』という本に結集させました。

この思想の中心は二種廻向にあり、つまり、「往相廻向」と「還相廻向」といって、“南無阿弥陀仏”を唱えれば、だれでもあの世に行けるし、この世に戻ってくることもできるというものです。この世で悩む多くの人たちを救うために、帰ってこなくてはならない、というのが親鸞の教えです。

この教えとは「自利利他」の精神です。すなわち、自分の利益として極楽浄土へ行くのは「自利」であり、他の人々を救うためにこの世に帰ってることが「利他」であります。

法然も次のようにいっています。釈迦の教えを聞くためにインド人として生まれたのが一回目の人生。二回目は中国の高僧として生まれ、三回目になって日本で浄土教を説くために生まれてきたと。

実は、この「二種廻向」「自利利他」が浄土宗で最も大事なことなのです。近代浄土教では、この面があまり強調されておらず「悪人往生」ばかりが目立っています。しかし、現代社会において最も重要なのはこの教えであり、いま一度、本来の浄土真宗の中心である二種廻向と自利利他に戻らなければならないと思います。

ロータリークラブも、「自利」だけでは意味がないでしょう。たしかに自利も重要ですが、「利他」の心こそ、人間になくてはならない大切な精神です。よいことをするために、この世に生まれてくることは、人間として極めて大事な役目です。これからの社会が、子どもたちに教えていかなければならないのは、奉仕をさせるのではなく、この「利他の精神」を教えることは、いちばん必要ではないかと思います。